

## ダグール語音韻史の再構成(2)

—母音間の\*kの軟音化について—

大竹昌巳

### 1. 母音間の軟口蓋音の対応

#### 1.1 WMon. q/k || Dag. g

ダグール語においては、モンゴル文語の母音間の硬音 q/k が軟音 Dag. g に対応する場合があります。この対応は、次の49例で確認される。なお、ここでは基本的に q と g の書き分けのない中世モンゴル語形は掲げず、モンゴル文語形とモンゴル国正書法による現代モンゴル語(ハルハ方言)形を挙げておく<sup>1</sup>。

(1) Dag.	WMon.	Mon.	gloss
ag	aq_a	ax	兄, 哥哥
arg <sup>j</sup>	araki(n), ariki(n)	архи(н)	酒
bag	buq_a	бух	忙牛, 种公牛
bæg	beke	бэх	墨
bogōr	buqur	бухуур	屁股
bugul <sup>j</sup>	büküli	бүхэл	整的, 整个的
— xagil <sup>j</sup>	— qaquuli	— хахууль	囫圇(吞枣)
bulg <sup>j</sup>	büleke, büleki, bülike	бүлх	肌腱
dag <sup>j</sup> -	daki-	дахь-	重复
daw	daqu	дах	斗篷
æg	eke	эх	母
əug <sup>w</sup>	ögekü(n)	өөх	肥肉, 脂肪
gag	gaqai	гахай	猪
gaig-	gaiqa-	гайх-	惊奇, 奇怪
garæg	gariq_a, garaq_a	гархи(н)	耳环
gog <sup>w</sup>	goq_a	гох	钩形图案
ǰag	ǰaq_a	—	长辈
ǰag	ǰaq_a	зах	…件; 衣领; 旁边
ǰug <sup>j</sup> -	ǰoki-	зохь-	对
ǰurg <sup>w</sup>	ǰirüke(n)	зүрх(эн)	心, 心脏

<sup>1</sup> モンゴル文字にも k と g の書き分けがないが、モンゴル文語転写の際には両者が区別される。

kumug	kömükei, kömügei	хөмхий	小舌
laug <sup>w</sup>	luuqa	луух	眼眇
mələg	melekei, menekei	мэлхий	蛙, 青蛙
mog <sup>w</sup> -	moqu-	мох-	受苦
m <sup>i</sup> ag	miq_a(n)	мах(ан)	肉
nog <sup>w</sup>	noqai	нохой	狗
nog <sup>w</sup> -	niqu-, nuqu-	нух-	揉, 和
nugur	nökür	нөхөр	爱人; 朋友
nug <sup>w</sup>	nüke(n)	нүх	孔, 窟窿
sagəl	saqal	сахал	胡须
sag <sup>i</sup> -	saki-	сахь-	看守, 看护
sogur	soqur	сохор	瞎的
sug <sup>w</sup>	süke	сүх	斧子
suwā-	sögege-, söküge-	сөхөө-	驳斥, 批评
s <sup>w</sup> aig	suiq_a	суйх	艾蒿
šag-	siqa-, siga-	шах-	擦, 抹
tog <sup>w</sup> -	toqu-	тох-	套(车), 备(鞍)
tog <sup>w</sup> lē	toqulai	—	拌牛奶或奶油的面片
ug <sup>w</sup> -	ükü-	үх-	死, 死亡
ujij ~ ugiṅ	ökin, okin	охин, өхин	女儿, 姑娘
xag-	qaqa-	хах-	噎住
xərag	erekei	—	(门、窗等的) 转轴
xərag	erekei	эрхий	拇指
xig ~ šig	yeke	их	大
xorg <sup>w</sup>	qoruqai	хорхой	虫
x <sup>w</sup> aig	quiq_a	хуйх	头皮
x <sup>w</sup> arəg	goruq_a, goriq_a	горхи	小溪
-(i)g	-ki	-х, -хь	「…もの」 <sup>2</sup>
-g <sup>w</sup> ~ -w	-qu/kü	-х	「…する～」 <sup>3</sup>

<sup>2</sup> 名詞類の属格形に附いて「…(の)もの」を表す(恩和巴图编著 1988: 545)。例えば,  
Dag. minīg 「私のもの」 < minī 「私の」 + -(i)g (WMon. minuki),  
Dag. sarīg 「月経」 < sarī 「(曆の)月の」 + -(i)g (WMon. sar\_a-yin-ki)。

また, 空間を表す名詞類(时位词)に附いて「…(に)あるもの」を表す。例えば,  
Dag. əndig 「ここにあるもの」 < ənd 「ここ(に, で)」 + -(i)g (WMon. endeki),  
Dag. x<sup>w</sup>ainig 「胎盤」 < x<sup>w</sup>ain 「北(に); 後ろ(に)」 + -(i)g (WMon. qoyinaki)。

<sup>3</sup> 非過去の形動詞語尾(恩和巴图编著 1988: 344f)。なお, 同書や恩和巴图等编(1984)では -gu ~ -wu と表記されるが, ダグール語の音韻体系その他を考慮して -g<sup>w</sup> ~ -w に改める。

この音変化について初めて指摘したのも Понне (1930)であり、「母音間の位置において〔WMon. qに対応する〕χと〔WMon. kに対応する〕kは原則として対応する有声音になった」(132頁,〔 〕内は引用者による。以下同様)と述べている。本稿ではこれを軟音化と呼ぶ。

## 1.2 WMon. q/k || Dag. k

しかし、続けて「x や k を保持する場合も見られる」(ibid.)<sup>4</sup>と述べているように、母音間でも k で対応する例がある。このような例は 44 例確認される。

(2) Dag.	WMon.	Mon.	gloss
akā	aq_a?	ax?	兄, 哥哥
akər	aqur	axar	卷毛, 卷发
bokir takir	bokir takir	бохир тахир	弯弯曲曲的
bok <sup>i</sup>	boki	бохь	松香
buk <sup>w</sup>	böke	бөх	摔跤手
buk <sup>w</sup>	böke	бөх	坚固的, 结实的
buk <sup>w</sup>	bökü(n)	бөх(өн)	驼峰
čakōl <sup>i</sup>	čaqlai, čaqalai	цахлай	江鸥
čiki	čiki(n)	чих(эн)	耳朵
čiki-	čiki-	чих-	塞, 填入
čokum ~ čogōm	čuqum, čoqum	чухам	究竟, 才是
čok <sup>i</sup> -	čoki-	цохь-	打(火镰)
čok <sup>i</sup> -	čoki-	цохь-	啄
čok <sup>w</sup>	čoqu	цох	太阳穴, 鬓窝
čōkur	čouqur, čoqur	цоохор	花的, 花色的
gəkui-	geki-, gekü-	гэг-	低头
gəkuləŋ	kökül, kökel	хөхөл	(额上的)长发
gəkū ~ gəkkū	köküğe, kökege	хөхөө	布谷鸟
gokē-	gokii-(?)	—	伸脖, 俯首
gokō	goq_a?	гох?	钩
kəkrē-	kekere-	хэхэр-	打嗝
kəkur	keüked	хүүхэд	子女
kək <sup>w</sup>	keüken, kegüken	хүүхэн	儿子
kuk <sup>w</sup>	köke	хөх	绿

<sup>4</sup> Понне はハイラル方言について記述しているため「x や k」と言っているが、我々が今扱っているブトハ方言では原則として x は語中に立たない(後述)。

lokui-	loqui-	лохой-	(粗胖人)端坐
maikāŋ	maiqaŋ	майхан	帐篷, 大帐篷
mukui-	meküi-	мэхий-, мөхий-	哈腰, 弯腰
nʷoskui	nisuqai	нусхай, нусгай	爱流鼻涕的
šakəŋ	siqam	шахам	左右, 将近
tak ~ takī	taq_a	тах	蹄铁
takir	takir	тахир	弯腿的
takī-	takii-	тахий-	挺胸直腰
taki-	taki-	тахь-	祭奠
tak <sup>w</sup>	taqu	тах	鳙
tok <sup>w</sup>	toqum	тохом	鞍屉
ukā	uqagan, uqag_a	ухаан, ухаа	知识; 计谋, 办法
wakəŋ	uqun_a, uqan_a	ухна	种公山羊
xək <sup>i</sup>	eki(n)	эх(эн)	头
xərk	erike(n)	эрх	数珠
xukur	üker	үхэр	牛
x <sup>w</sup> akər	oqur	охор	短的
x <sup>w</sup> ark	uraq_a(n)	урх(ан)	套索
-mkē ~ -kē	-maqai/mekei	-мхай/мхой/мхий	「…しがちな」 <sup>5</sup>
-kəŋ/kuŋ	-qan/ken	-хан/хэн/хон/хөн	「少し… ; かなり…」 <sup>6</sup>

## 2. 条件の検討

前稿と同様に、母音間にありながら(1)で軟音化が生じ、(2)で生じなかった条件について検討するが、これに関してはすでに Poppe (1955)および角道 (1987) による記述がある。

### 2.1 Poppe (1955)

Poppe (1955)では、\*i以外の母音 (\*a, \*o, \*u) の前にある語中の\*q, \*iの前にある語中の\*q, 語中の\*kの3つの環境で別々に記述がなされている。ただし条件について詳しく述べているのは語中の\*kの場合のみで、次のように述べる (143-144 頁) :

<sup>5</sup> 動詞語幹に附いて「…しがちな」意の形容詞を派生させる (恩和巴图编著 1988: 546f)。例えば, Dag. čočimkē ~ čočkē 「驚きやすい, よく驚く」 < čoč- 「驚く」 + -mkē ~ -kē (WMon. čočimaqai), Dag. xičimkē ~ xičkē 「はにかみ屋の」 < xič- 「恥ずかしがる」 + -mkē ~ -kē (WMo. ičimekei)

<sup>6</sup> 形容詞に附いて, その語義を弱めたり強めたりする。-ŋ 終わりの形容詞では-ŋ を落とす (恩和巴图编著 1988: 235)。例えば,

Dag. xalūkuŋ 「暖かい」 < xalūŋ 「熱い, 暑い」 + -kəŋ (WMon. qalaguqan),  
Dag. saikəŋ 「きれいな, 美しい」 < saiŋ 「よい」 + -kəŋ (WMon. sayiqan)。

「ダグール語において、母音間の\*kは、\*φ > h > ゼロで始まる語<sup>7</sup>あるいは硬音の破裂音・破擦音または無声摩擦音で始まる語で、また子音の後でも、kになり (a)、lやrの後でkになる (b)。残りのすべての場合に\*kはダグール語でgになる (c)。」

この文はこのままでは意味不明で、最低限「母音間の\*k」を「語中の\*k」に読み替えなければ文意が通らない。Poppeはまた、上の記述を表でまとめた部分では次のように書いている (144頁)：

- 「Dag. (a) k \*φ > h > ゼロで始まる語または硬音の破裂音・破擦音で始まる語の初頭音節と第二音節の母音の間で。  
(b) k 子音lとr (< 初頭音節を閉じるあらゆる子音) の後で<sup>8</sup>。  
(c) g 母音か軟音の子音 (または有声音、特に鼻音) で始まる語 [の母音間] で。」

本文と表とでは述べている内容・分類にいくつかの異同があるが、最も大きな違いは「無声摩擦音 [すなわち s と š] で始まる語」の帰類であろう。本文中では (a) に入れてあるが、表中ではどれにも該当しない。実際には Poppe の参照しえた資料の中にはこの条件に該当する例がなく<sup>9</sup>、当て推量で (a) に入れたものと思われるが、後述するようにこれは誤りである。

他にも Poppe の記述する条件では説明できない例が多く、この一般化は成功していない。

## 2.2 角道 (1987)

一方、角道 (1987) は以下のように一般化した (10-11頁)：

「有声化【…】が起こったのは、ほぼ次のような条件であったと考えられる。

- ① 母音間にあること (すなわち直前に子音がないこと)。【…】
- ② 後続の母音が短母音であること。すなわち、有声化が起こった段階で後続の母音が長母音ではないこと。【…】
- ③ 語頭あるいは問題となっている音節の前の音節に無声子音がないこと。ただし、sは別である。【…】

<sup>7</sup> Poppeは主にハイラル方言の資料に基づいたため「\*φ > h > ゼロ」と言っているが、ブトハ方言では\*hはxに合流した。

<sup>8</sup> Poppeが、どんな音節末子音であろうとr(やl)になると考えたのは誤りである。阻害音\*b, \*d, \*g, \*sのr音化(ダグール・ロータシズム)は確かに存在するが、鼻音\*m, \*n, \*ŋはその限りではないし、阻害音であっても必ずr音化するわけではない。ここの記述は「あらゆる子音の後で」と単純化すればよい。

<sup>9</sup> ただし\*qについてであれば、Pomme (1930)の資料にもsを初頭にもちながら軟音化を起こした例がある：saḡāl ~ saḡāl 「鬚, 髭」(WMon. saqal), carī- 「守る, 番をする」(WMon. saki-)。

- ④ 問題となっている音節がある種の形態素ではないこと。例えば wairkan [本稿の表記では wairkəŋ] 「近い」、uqiiken [učikəŋ] 「小さい」の -kan ~ -ken [ともに -kəŋ] の k は有声化しない。一方、形動詞の -wu [-g<sup>w</sup> ~ -w] はすべて有声化している。」(【…】は原文の省略を表す。以下同様。)

①は当該変化の前提となる基本的な条件で、②～④がそれを阻害する条件を述べたものである。角道 (1987) の記述は Poppe (1955) の記述よりも説明能力があるが、依然として十分でない部分がある。以下ではこれを補訂する形で議論を進める。

### 2.3 条件の修正

まず角道 (1987) の①の記述「母音間にあること」が「直前に子音がないこと」と同値であることは、論証を要する。というのも、確かにモンゴル祖語においては、文語の表記と同様、硬音\*/k/ (WMon. q/k) は音節末には立たない(すなわち直後には常に母音を伴う)から、語中で直前に子音がないこと(すなわち直前に母音があること)は母音間にあることと同値であるが、今検討している軟音化(角道 1987 のいう「有声化」)が生じた段階で、そのような状況がまだ保たれていたかは自明ではないからである。

結論から言えば、この前提は正しい。以下に論証過程の概略を示す：満洲語由来の借用語を見ると、WMan. k はどの位置でも常に Dag. k で借用されている<sup>10</sup>。すなわち、満洲語の借用語には軟音化が生じていない。一方、満洲語の借用語には母音の折れが生じている(前稿参照)。したがって、軟音化は母音の折れに先行する。母音の折れは、祖語の音節構造が保たれていることを前提とする。ゆえに、軟音化が生じた際には祖語の音節構造がまだ保存されていた。

次に②の条件は Poppe (1955) には示されていなかったが、明らかに必要である。これによって、Dag. ukā (WMon. uqaq\_a(n)), Dag. gokī- (WMon. gokii-) 等の例で軟音化が生じなかったことが説明される<sup>11</sup>。この条件の存在は、次の 2 組の対によっても顕著に示唆される。

(3) Dag.	WMon.	Mon.	gloss
ag	aq_a	ax	兄, 哥哥
akā	aq_a?	ax?	兄, 哥哥
gog <sup>w</sup>	goq_a	rox	钩形图案
gokō	goq_a?	rox?	钩

ただし、「後続の母音が短母音であること」は「後続の母音が長母音ではないこと」と同

<sup>10</sup> 母音間の例を挙げると、Dag. jak 「もの」(< WMan. jaka, Man. 'dza:⁴χa 「id.」), Dag. bulk<sup>w</sup> 「鏡」(< WMan. buleku, Man. 'bulko 「id.」) など。

<sup>11</sup> ただし Dag. bogōr (WMon. boqur, Mon. 6xyyp) のような例外もある。

値ではなく、「後続の母音が長母音および二重母音ではないこと」と同値である。二重母音は、Dag. **lokui-** (WMon. loqui-), **mukui-** (WMon. meküi-), Dag. **n'oskui** (WMon. nisuqai) 等の例から、長母音と同様、阻害の条件となることがわかる。重い母音が阻害の条件として働くことは、軟音化よりも前に母音の縮約 (\*V'V > VV) が生じていたことを示す。

ところで④の条件は恣意的で個別的な説明になっており、一般化とは言えない。ここで(1)を見ると、Dag. -g (WMon. -ki) と Dag. -g<sup>w</sup> (WMon. -qu/kü) では軟音化が生じ、(2)の Dag. -mkē (-maqai/mekei) と Dag. -kəŋ (WMon. -qan/ken) では生じていないが、このうち Dag. -g, -g<sup>w</sup>, -mkē は②の条件で説明することができるのであり、④のような条件をわざわざ認める必要がない<sup>12</sup>。

残りの Dag. -kəŋ (WMon. -qan/ken) についても、Dag. **šakəŋ** (WMon. siqam), Dag. **wakəŋ** (WMon. uqun\_a)<sup>13</sup>, Dag. **maikəŋ** (WMon. maiqan)<sup>14</sup>のように母音+鼻音韻尾が直後にある場合に軟音化が阻害されているので、これも阻害の条件に加えるべきである<sup>15</sup>。重い母音と母音+鼻音韻尾が類似のふるまいを示すことは、前稿で触れたモンゴル語チャハル方言の軟音化でも見られた現象である。

最後に③については Poppe (1955)も類似の条件を挙げているが、角道 (1987) が「s は別である」と明示しているように、摩擦音\*/s/ (音声的には\*iの前では[ʃ]であったと思われる) は阻害の条件とはならない。このことは、Dag. **sagəl** (WMon. saqal), Dag. **sagi-** (WMon. saki-), Dag. **sogur** (WMon. soqur), Dag. **sug<sup>w</sup>** (WMon. süke), Dag. **s<sup>w</sup>aig** (WMon. sui\_q\_a), Dag. **šag-** (WMon. siqa-) の諸例から明らかである。

ただし、(s 以外の)「無声子音」(本稿では硬音) と一般化するのは問題がある。確かに硬音\*t, \*č が直前の音節にある場合に軟音化が阻害されることは明らかだが、硬音の軟口蓋音の場合には調音様式によって結果に差異が生じている。

<sup>12</sup> このうち Dag. -g<sup>w</sup> (WMon. -qu/kü) は子音終わりの動詞語幹にも附くので、常に母音間という条件を満たすわけではないが、paradigm levelingにより当該変化を被ったと考えるべきであろう。この接尾辞に関して、次のような語彙がある。

Dag. **wangui** 「西 (日の落つる方)」 < wan- 「倒れる, 落ちる」 + -g<sup>w</sup> + -ī (WMon. unaqu-yin)

Dag. **garkui** 「東 (日の出づる方)」 < gar- 「出る」 + -g<sup>w</sup> + -ī (WMon. garqu-yin)

これらは動詞の形動詞形 Dag. **wanəg<sup>w</sup>**, **gark<sup>w</sup>** (WMon. unaqu, garqu) に属格語尾 Dag. **ī** (唇音化子音の直後では -ui) を附したものであるが、当時すでにある程度語彙化していたために、PDag. \*garku (> Dag. gark<sup>w</sup>) の \*ku が paradigm leveling の対象とならなかったものか。また、重い母音 -ui が後続するが、格語尾は語幹の音変化には関与しないために、PDag. \*unaku-yi (> Dag. wangui) において阻害の条件として働かなかったのであろう。

<sup>13</sup> この対応は規則的ではなく、Dag. **wakəŋ** の祖形としては PDag. \*ukan (\*ukana, \*ukuna ではなく) が予想されてしまう。

<sup>14</sup> Martin (1961)には maikan, Тодаева (1986)にも маикан とあり、k の直後は短母音であるので、これを②の条件で説明することはできないであろう。

<sup>15</sup> Dag. **ugiŋ** (WMon. ökin) では当該変化が阻止されていないが、阻害条件にない複数形 Dag. **ugir** (WMon. ökid) からの類推による可能性が考えられる。

(4) Dag.	WMon.	Mon.	gloss
xag-	qaqa-	хах-	噎住
x <sup>w</sup> aig	quiq_a	хуйх	头皮
kəkrē-	kekere-	хэхрэх	打嗝
kəkur	keüked	хүүхэд	子女
kək <sup>w</sup>	keüken, kegüken	хүүхэн	儿子
kuk <sup>w</sup>	köke	хөх	绿

すなわち、直前の音節（初頭音節）に破裂音 Dag. k がある語では変化が妨げられるのに対して、摩擦音 Dag. x がある語では軟音化は阻止されていない。この違いを最も素直に説明する仮説は、この変化が生じた時期にもこれらの語の初頭の軟口蓋音は同様の調音様式であり、破裂音\*k がある場合には (\*t, \*č と同様に) 変化が阻害され、摩擦音\*x がある場合には (\*s, \*ʃ と同様に) 変化が阻害されなかった、というものである。

注目すべきは、これらの例において、摩擦音 Dag. x は WMon. q (男性母音 WMon. a, o, u の前に立つ) に対応し、破裂音 Dag. k は WMon. k (その他の母音の前に立つ) に対応することである。確かに WMon. q と WMon. k は相補分布しているので、モンゴル祖語においては音韻論的に1つの音素\*/k/を認めるのみでよいが、両者は、その子孫言語の多くで音声的に異なる発展過程を辿ったことも知られている。例えば、中世モンゴル語を写した漢字文献では、q を原則として摩擦音の声母をもつ字で音写するのに対し、k を破裂音の声母をもつ字で音写している。また、現代のオイラト系言語では、WMon. q に対して摩擦音が、WMon. k に対して破裂音が対応する。実際、ダグール語でもチチハル方言とハイラル方言で、語頭において同様の分布を示す（第3節の表1参照）。これらの事実は、先ダグール語の語頭においても、男性母音\*a, \*o, \*u の前では摩擦音\*x が、それ以外の母音の前では破裂音\*k が立ち、相補分布していたという仮説が十分にありうることを示唆している。

上記の仮説を受け入れるとき、軟音化は直前の音節に硬音の閉鎖子音\*t, \*č, \*k がある時には阻害されるが、摩擦音\*s, \*ʃ, \*x がある時には妨げられないことになるので、この音変化の阻害条件は「硬音一般」ではなく「硬音の閉鎖子音」に限定されなければならない。

これを踏まえた上で、\*p > \*h に由来する x をもつ語を見ると、Pope が指摘したように、軟音化は阻害されている<sup>16</sup>。

(5) Dag.	MMon.	WMon.	Mon.	gloss
xək <sup>i</sup>	heki (< PMon. *peki)	eki(n)	эх(эн)	头
xukur	hüker (< PMon. *püker)	üker	үхэр	牛
x <sup>w</sup> akər	oqor (< PMon. *pokar)	oqur	охор	短的

<sup>16</sup> ただし Dag. xig (MMon. yeke < PMon. \*pike) 1例は例外とみなす。

既述のように、硬音の摩擦音は軟音化を阻害することではなく、ただ硬音の閉鎖子音のみが阻害の条件となるから、あくまで条件の一貫性を保とうとすれば、軟音化が生じた当時のダグール語において、いわゆる「語頭の h」は摩擦音 \*h や \*ϕ ではなく、破裂音 \*p の段階にあったと大胆に想定することも可能ではある。現代の多くのモンゴル系諸言語が失った「語頭の h」をダグール語が少なくとも 18 世紀半ばにはまだ \*h として保持していたと考えられる（続稿で述べる）ことは、ダグール語では唇音退化 (\*p > \*ϕ > \*h) が他の言語より比較的遅くに生じたことをあるいは意味するかもしれない<sup>17</sup>。

しかし一方で、それを支持するような別のデータ（あるいは否定するデータ）はダグール語内部からは目下得られておらず、結論を出すにはなお慎重であるべきであろう。

さて、以上ですべての条件を検討し終えたが、まだ説明のできない例が数例残っている。一部では阻害されるべき環境にあるにもかかわらず軟音化が生じているように見え、また一部では変化が妨げられる環境にないにもかかわらず軟音化が生じていないように見える。現段階ではこれらは個別的な例外とみなさざるを得ない。

### 3. 先ダグール語における軟口蓋音の様相

本節では、前節で検討した軟音化が生じる以前の硬音の軟口蓋音の様相について考えてみたい。

前節では、先ダグール語期に硬音の軟口蓋音が語頭では男性母音 \*a, \*o, \*u の前で摩擦音 \*x であり、女性・中性母音 \*e, \*ö, \*ü, \*i の前で破裂音 \*k であったと推定した。では、語中ではどのような状態にあったであろうか。表 1 に示す現代ダグール語諸方言における k/x の分布を参照すると、当時の語中における状況として、(i) 語頭と同様に \*x (\*a, \*o, \*u の前で) と \*k (その他の母音の前で) が相補分布していた、(ii) 後続の母音に関わらず \*k のみが立ち

【表 1】ダグール語諸方言におけるモンゴル文語の q/k との対応原則

(母音間の軟音化の例を除く。新疆方言は开英編 1982, チチハル方言は胡和編 1989, ハイラル方言は津曲 1986 および Понпе 1930 に拠り, ネメール方言は恩和巴图編著 1988: 125f の記述に基づいて作成した。)

	モンゴル文語		ブトハ	新疆	チチハル	ハイラル	ネメール
語頭	a, o, u の前	q	x, k	x, k	x	x	k
	e, ö, ü, i の前	k	k, x	k, x	k	k	
非語頭	a, o, u の前	q	k	k	k	x	
	e, ö, ü, i の前	k				k	

<sup>17</sup> ちなみに 11-12 世紀の契丹小字で表記された契丹語では、語頭の \*p を保存すると同時に、二次的長母音がすでに発達していた（契丹語の二次的長母音については大竹 in print を参照）。このような状況が当時のダグール語にも存在したならば、当該変化の条件は非常に均整のとれたものとなる。ただし、このことによって契丹語とダグール語に直接の系統関係があることを主張しているわけではまったくない。

えた、の2通りの可能性が考えられる。

(i)を想定する場合は、現在までにハイラル方言以外のすべての方言で語中の\*x, \*kが(ネメール方言では語頭でも)kに合流したと考えねばならず、逆に(ii)の場合はハイラル方言での分化を想定しなければならない。

Тодаева(1986: 31-33)は(i)の状況を想定し、母音間で\*x > g, \*k > gという2つの音変化があったと考えた。すなわち、ハイラル方言が最も古い状態を保っていると考えられるわけである。

ところで満洲語由来の借用語を見てみると、語中のWMan. xは大部分Dag. gで借用されている<sup>18</sup>が、まれにDag. xで借用される場合がある(長母音が後続する場合に限る)。

(6) Dag.	gloss	WMan.	Man.	gloss
ašxātā	书生	< asixata	cf. a:škun <sup>19</sup>	少年, 青年
əlxē	平安	< elxe	uul'γu	id.
usxā- ~ isxā-	寂寞, 苦恼	< usxa-	—	id.
uxērī	共, 全体, 全部	< uxeri	u'γure	id.

もしも(i)の仮説に立つて\*x > kを想定するならば、それは満洲語語彙が借用され定着する前でなくてはならない。しかし満洲語の借用・定着は、歴史的にはハイラル方言がブトハ方言またはチチハル方言から分岐する以前に生じたと考えられる(前稿参照)。ところがハイラル方言が分岐する以前に\*x > kが生じたとする、現代のハイラル方言のk/xの分布が説明できず、矛盾に陥る。

実際、清朝期に満洲文字で書かれたダグール語文献(Engkebatu 2001 および恩和巴图 1994を参照)のうち最も古い17世紀末の作というČooxa-i kūwaran-du(『兵營にて』)を見ると、

<sup>18</sup> 語中のWMan. xの多くは有声音間にあるが、その環境では満洲語の摩擦音は有声化するので、ダグール語では原則として/g/で借用される。

Dag. ilgā	「花, 花朵」	< WMan. ilxa	Man. il'ka:	「id.」
Dag. tubig	「水果」	< WMan. tubixe	Man. 'ty:biγu	「id.」

ただし、有声音間がないにも関わらずDag. gで借用される場合もある。これはダグール語の内部にその要因があるのか、外部(満洲語の内部)に要因があるのか不明である。

Dag. n'asgəŋ	「墨线(木匠用具)」	< WMan. misxan	Man. mes'χan	「id.」
Dag. gasgəŋ ~ gasxəŋ	「灾, 灾害, 灾难」	< WMan. gasxan	Man. gas'χan	「id.」

また、語中のWMan. fも同様にDag. /b/で借用するのが原則である。

Dag. pabuŋ	「令, 法制」	< WMan. fafun	Man. fa'vun	「id.」
Dag. səb	「老师, 师傅」	< WMan. sefu	Man. 'su:vu ~ su:vo	「id.」

ただし語中のWMan. s, šはDag. /s, š/で借用される。

Dag. g <sup>w</sup> as	「(行政単位の)旗」	< WMan. gūsa	Man. gu'zan	「id.」
Dag. onšuŋ bē	「十一月(多指阴历)」	< WMan. omšon biya	Man. ɔmzɔn bia	「id.」

<sup>19</sup> 清格尔泰(1982)に収録されていないため恩和巴图(1995)から補った。ちなみにWMan. asixataはWMan. asixanの複数形である。

現代ダグール語の語中の k については男性母音の前でも WMan. k で表記されているし、19 世紀のハイラル南屯（バヤントホイ）出身の作家 Arabtan（敖拉昌興）の作品でも現在のハイラル方言とは異なる k/x の分布を呈している<sup>20</sup>。

以上より、現在のハイラル方言の k/x の分布は改新的な特徴であり、ダグール語の古い段階を直接継承するものではない。このことは、ハイラル方言が全般に改新の目立つ方言であるという事実と矛盾しない。

したがって、かつては語中に破裂音 \*k のみが立ちえ、摩擦音 \*x はなかったという(ii)の仮説が支持される。このことから、前節で検討した音変化は、母音間の破裂音 \*k が軟音化する音変化であったと考えられる。

#### 4. 小結

最後に、本稿で述べた母音間の \*k の軟音化の条件をまとめておくと、暫定的に以下のようになる。

- (7) その音節に重い母音または鼻音韻尾が含まれる場合、あるいは直前の音節に硬音の閉鎖子音または \*p > \*h が含まれる場合を除いて、母音間の硬音閉鎖子音 \*k は軟音 g になった。

上記音変化に関する音変化間の相対年代について確認しておくと、この音変化は重い母音によって阻害されるので、2 音節の母音連続  $V_1V_2$  が 1 音節の重い母音  $V_1V_2$  に縮約した後に生じたと考えられる。また、第 2 節で触れたように、\*k の軟音化は母音の折れ (\*i の折れおよび円唇母音の折れ) より前に生じたと考えられる。

興味深いことに、本稿で扱った音変化が阻害される条件は、前稿で扱った語頭の \*t の摩擦音化が阻害される条件と類似しているばかりでなく、その相対年代に関しても、同様の時期に生じたことが推定される。これらの音変化はダグール語では比較的初期に生じた変化であり、文献資料からは少なくとも 17 世紀末にはすでに完了していたことが窺われる。

#### 略号

Dag.	Dagur	ダグール語（ブトハ方言）
Man.	Manchu	満洲語（三家子方言）
MMon.	Middle Mongolian	中世モンゴル語
Mon.	Mongolian	モンゴル語（ハルハ方言）
PDag.	Pre-Dagur	先ダグール語

<sup>20</sup> そのほか、Poppe (1934) はメケルト近辺のハイラル方言を満洲文字で書き取った資料を載せるが、この方言では、語中では男性母音の前でも k が立つことの方がむしろ多い。

PMon. Proto-Mongolic モンゴル祖語  
WMan. Written Manchu 満洲文語  
WMon. Written Mongolian モンゴル文語

#### 参考文献

##### 【和文】

角道正佳 (1987) 「ダグール語南屯方言の特徴」『大阪外国語大学学報』74(1/2), 1-18  
津曲敏郎 (1986) 「ダグール語ハイラル方言基礎語彙」『モンゴル研究』(日本モンゴル学会)  
第17号, 2-38

##### 【中文】

大竹昌巳 (in print) 《契丹语的元音长度》《华西语文学刊》第八辑, 86-96  
恩和巴图 (1994) 《谈满文字母的达斡尔文》《民族语文》1994年第2期, 76-78  
—— (1995) 《满语口语研究》呼和浩特: 内蒙古大学出版社  
恩和巴图编著 (1988) 《达斡尔语和蒙古语》呼和浩特: 内蒙古人民出版社  
恩和巴图等编 (1984) 《达斡尔语词汇》呼和浩特: 内蒙古人民出版社  
胡和编 (1989) 《达斡尔语汉语对照词汇》齐齐哈尔: 黑龙江省民族研究所、黑龙江省达斡尔  
学会  
开英编 (1982) 《达斡尔、哈萨克、汉语对照词典》乌鲁木齐: 新疆人民出版社  
清格尔泰 (1982) 《满洲语口语语音》《内蒙古学报 (哲学社会科学版)》纪念校庆 25 周年专  
刊 (载: 《清格尔泰民族研究文集》北京: 民族出版社, 1997年, pp. 232-355)

##### 【蒙文】

Engkebatu (2001) *Čing ulus-un üy\_e-dü Dagur kele-ber bičigdegsen jokiyal-ud-un sudulul.*  
Kökeqota: Öbür Monggul-un yeke surgaguli-yin keblel-ün qoriy\_a (恩和巴图 (2001) 《清代  
达呼尔文文献研究》呼和浩特: 内蒙古大学出版社)

##### 【英独文】

Martin, Samuel E. (1961) *Dagur Mongolian Grammar, Texts, and Lexicon: Based on the Speech of  
Peter Onon.* Bloomington: Indiana University. (Reprinted by Richmond: Curzon, 1997)  
Poppe, Nikolaus (1934) “Über die Sprache der Daguren”, *Asia Major* 10. 1-32, 183-220.  
Poppe, Nicholas (1955<sup>1</sup> 1987<sup>2</sup>) *Introduction to Mongolian Comparative Studies.* Helsinki:  
Suomalais-ugrilainen Seura.

##### 【露文】

Поппе, Н. Н. (1930) «Дагурское наречие» Ленинград: Изд-во АН СССР.  
Тодаева, Б. Х. (1986) «Дагурский язык» Москва: Наука.

## Reconstruction of the Phonological History of the Dagur Language (2)

—Lenition of intervocalic *\*k*—

ŌTAKE Masami

### Abstract

There are many cases where Written Mongolian *q* or *k* in intervocalic position corresponds with Dagur *g*, which means that (a part of) intervocalic *\*k* became *g* in Dagur. Some previous studies remarked on this sound change and tried to determine the condition although the attempts were only partially successful.

This paper aimed at correcting the condition of this change and determining the relative order among related sound changes. The results are as follows:

(i) Fortis stop *\*k* in intervocalic position became *g* except for the cases where the same syllable included a heavy vowel or a nasal coda or where the immediately preceding onset consonant was a fortis stop or affricate or *\*p > \*h*.

(ii) The above change occurred later than vowel contraction ( $*V_1'V_2 > V_1V_2$ ) and earlier than vowel breaking ( $*Ci...V_\alpha > CiV_\alpha...V_\alpha / *CU...V_\alpha > *C^wV_\alpha...V_\alpha$ ).